様式 C-19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年６月２５日現在

機関番号：３４３１７
研究種目：新学術領域研究（研究課題提案型）
研究期間：2009～2011
課題番号：２１２０００２７
研究課題名（和文）：最初期テレビ CM の学際的研究
——ネットワーク配信による研究・教育活用システムの構築
研究課題名（英文）：An Interdisciplinary Study of the Earliest TV Commercials
—— Building a web system for research and education

研究代表者：
前田庸生（MAEDA TSUNEO）
京都精華大学・マンガ学部・教授
研究者番号：５０４３４７５９

研究成果の概要（和文）：本研究において、①テレビ CM アーカイブズ活用システムの構築、②テレビ CM 資料の渉猟、デジタル化、データベースへの追記、③テレビ CM データベースのネットワーク配信、④テレビ CM の実証調査研究、⑤テレビ CM データベースの研究教育活用をほぼ実現した。
研究成果の概要（英文）：This study project has almost fully achieved the following goals:
①Building a web system for practical use of the TV commercial archive
②Collecting appropriate source materials, digitizing and adding them to the database
③Distributing the TV commercial database through a web system
④Positivistic study of TV commercials
⑤Actualizing the use of the database in research and education

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
平成２１年度	7,900,000	2,370,000	10,270,000
平成２２年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
平成２３年度	5,000,000	1,500,000	6,500,000
年度			
年度			
総　計	19,700,000	5,910,000	25,610,000

研究分野：総合領域
科研費の分科・細目：文化財科学・文化財科学
キーワード：文化資源

１．研究開始当初の背景

(1) 先行研究

わが国における本格的な先行研究例としては、2003～2005 年度まで国際日本文化研究センターで開催された共同研究会「コマーシャル映像にみる物質文化と情報文化」および同センターで開催された第 28 回国際研究集会「売る文化、売られた文化——テレビコマーシャルによる文化研究を探る」がある。この共同研究は ACC 賞を受賞したテレビ CM データベースを基礎資料として行われ、これらの研究成果は『文化としてのテレビ・コマーシャル』（山田奨治編、世界思想社、2007 年）ならびに論文集『売る文化、売られた文化：テレビコマーシャルによる文化研究を探る』（国際日本文化研究センター、2006 年）として上梓され、ここに“テレビ CM 研究”の地平が拓かれた。

一方、京都精華大学（以下、本学）では 2005 年度に CM 制作プロダクション・株式会社テイ・シー・ジェー（TCJ/東京）作品の 1954～68 年にかけての最初期テレビ CM データ

ベースを構築、その後、さがスタジオ（京都）作品ならびにハイスピリット社（大阪）作品を併収し、約 1 万点に上るデータベースに拡充していた。

2006 年より国際日本文化研究センターでの共同研究会を継承するかたちで立ち上げられた「テレビ CM 研究プロジェクト」（学内外研究者約 20 名で構成）においてはこれらのデータベースを基礎資料とし、共同研究会の構成メンバーを招聘して、年 4 回のペースで研究会を開催。その中間研究成果として研究会報告書『テレビ CM 研究』Vol.1（No.1）～Vol.2No.3 を発刊、CM 関連研究者に配布するとともに国立国会図書館にも納本して閲覧に供していた。

一方、メディアを中心としたテレビ CM をめぐる社会趨勢の変化も注目された。雑誌『東京人』（2007 年 10 月号）で昭和 30 年代のテレビ CM 特集が組まれたのをはじめ、新聞紙上でもテレビ CM 関連の報道が目立つようになり、確実にテレビ CM に対する注目度が高まりつつあるなか、高度経済成長期のわが国の産業や文化・経済・政治の姿を如実に映し出し、いまに伝える文化資源であり大衆芸術でもあるテレビ CM 研究の途が拓かれることを希求した。

（2）テレビ CM 資料の渉猟・発掘

さらに、テレビ CM 研究プロジェクトと併行して進められていた関西アニメーション史研究プロジェクトの聞取調査のなかで、希少な初期テレビ CM フィルムに関する情報が寄せられるとともに、積極的にデジタル化を進めた。

散逸するテレビ CM 映像を記録・保存し、活用の途を拓くことは今後のテレビ CM 研究はもとより多分野の学術研究や教育に資するところ大であると目論んだのである。

一方、テレビ CM 研究プロジェクトを推進するなかで課題となったのが、研究者が自由にデータベースにアクセスし閲覧できる環境づくりおよび著作権等への対応である。

理由は、第 1 に専攻分野を異にする研究者による多分野からの知見の集約が可能な環境のもとに横断的研究を実現し、テレビ CM 研究を深耕させること、第 2 にデータベースに多角的な検索機能を付加するには研究者が自由に書き込める環境を必要とすること、第 3 に著作権や肖像権がクリアされていない CM 映像データを PC にコピーして研究者に供することに伴うリスク（データの遺漏等）を回避することが現状では強く求められること、であった。

以上の課題を解決して研究を推進するには、パスワードで管理されたネットワークによるデータベース配信を実現する必要にせまられた。

また、初期テレビ CM の特徴のひとつとしてアニメーションが多用されていることが挙げられる。アニメーション分野の講座を擁する本学においては（現マンガ学部アニメーション学科）、1963 年に放送を開始した「鉄腕アトム」以前のテレビ・アニメ資料は、当時のアニメ技術や表現手法を学ぶうえで格好の教材であり、教育活用も多いに期待されたのである。

２．研究の目的

（1）研究構想

テレビ CM は、戦後《**大衆文化**》を如実に映し出す貴重な《**文化資源**》である。

テレビ CM は〈テレビ CM 史〉〈テレビ史〉〈文化映画史〉〈戦後経済史〉〈戦後日本生活文化史〉〈広告史・メディア史〉〈文化資源学〉等々の多くの研究テーマを孕みながら、従来、研究対象としてあまり省みられることのなかった文化資源である。とくに、初期テレビ CM 資料の大部はすでに散逸し、かろうじて残されている CM フィルムも廃棄・逸失や劣化が懸念される現状にある。

本学には、**最初期テレビＣＭデータベースとして**はわが国で随一の規模と内容を有する、1954～1968 年頃までの約 1 万タイトルに及ぶ、きわめて貴重なテレビ CM データベースをすでに保管しており、本データベースの研究教育分野における有効活用およびデータベースの拡充が必須であった。

そのため本研究では、このデータベースを基盤に、さらに初期テレビ CM フィルムを渉猟し、デジタル化をはかってデータベースに蓄積するとともに、学術研究および教育の多くの場面で活用することができるテレビ CM の“アーカイブ活用システム” を構築しつつ、Web 上で閲覧可能な環境を作ることによって、より広範な研究・教育場面での活用を促すことがテレビ CM 研究を推進し、社会的認知を得る有効な手立てであると位置づけた。

本学が所在する関西圏には、テレビ CM 映像を保有する研究機関が本学を含め 3 つある。ひとつは ACC 賞を受賞したテレビ CM データベース（約 4,500 タイトル）を保有する国際日本文化研究センター、もうひとつは関西のテレビ CM 制作会社であるハイスピリット社から寄贈されたテレビ CM フィルム（約 2,800 タイトル）を保有する立命館大学である（本 CM データベースは本学と共有。その後、2010 年には大阪萬年社コレクションのテレビ CM データベースを本学と協働して保有する大阪市立大学が加わり、4 研究機関となった）。

研究・教育での活用をより積極的に推進するには、まず、これら 3 機関間のネットワークの構築が不可欠であり、さらに、現代に至るテレビ CM 資源の活用をはかるには、CM

関連ライブラリーや大手広告代理店とのネットワーク化を実現し、より多くのテレビ CM 資源へのアクセス可能な体制を実現することが望ましいと構想した。

すなわち、本研究プロジェクトの最終目標は、本学を中心とするテレビ CM 資源の教育研究活用のための物的・人的ネットワーク拠点（ハブ）を形成することと位置づけたのである。

（2）研究目的概要

本研究の目的は、第 1 に貴重な文化資源であるテレビ CM 資料を渉猟し、フィルムを中心とした資料のデジタル保存を行うとともに、既存のテレビ CM データベースへの追記を行い、データベースの拡充をはかること。

第 2 に研究資源としての活用をはかるために、専門の異なる研究者が多角的かつ体系的にアクセス―検索可能なアーカイブズ活用システムを構築すること。

第 3 にそのデータベースを活用した研究を推進し、併行して教育現場での活用をはかるとともに、テレビ CM データベースの研究・教育活用の実践を通じて、活用現場での課題をフィードバックし、より汎用性の高いデータベースとする。

以上の目的を達成するために、テレビ CM データベース（動画）配信のためのネットワークを構築して研究・教育活用を促進、“テレビ CM 研究”という新たな研究分野を確立するというものである。

（2）具体的目的

本研究は 3 年間で下記の事項を明らかにすること目的した。

・テレビ CM アーカイブズ活用システムの構築。
・テレビ CM 資料の多角的・横断的研究によるテレビ CM 文化の形成と変容の析出と研究成果の創出。
・テレビ CM の文化資源としての位置づけの確立。
・テレビ CM の教育教材としての可能性と課題の析出（アニメーション、映像資料等の側面）。
・テレビ CM の技術発達史の解明。
・以上の成果からテレビ CM 研究の有為性を明らかにする。

（3）社会的波及効果

先述の『文化としてのテレビ・コマーシャル』で山田奨治氏は「日本のテレビ CM は、一九五三年に誕生した。歴史学者によると、五〇年前のことは歴史学の立派な研究対象になりうるという。その意味では、CM も歴史研究の資料とみなされてもよい時代になってきた。」と記している。

テレビもしくはテレビ文化は、従来、社会学とくにメディア論の範疇で取り上げられてきた。しかし、テレビ CM に関しては、国際日本文化研究センターの共同研究会を除いて、体系的・横断的な先行研究例はあまり見当たらなかった。とりわけ、最初期のテレビ CM については、その所在がほとんど確認されておらず、本学のデータベースによってはじめて研究対象たりうる質と量が備わり、ここに最初期テレビ CM の歴史的現物資料に基づく研究が可能になったのである。

また、テレビ CM 研究によって解明される事柄は計り知れないにもかかわらず、研究テーマとしては未だ市民権を得ていない。その要因のひとつとして、テレビ CM が音声・音楽・ナレーション・テロップ・映像・アニメ等々、重層的・複綜的な要素から成り立っていることが挙げられる。それ故に、従来の分科・細目区分では包摂しきれない多岐にわたる分野の研究者および実作者の協働（collaboration）なくしては、その全体像の把握、理解、解明はむずかしいと目された。而して、従来の日本型学問文化における聖典を突き崩すベクトルと位置関係を意識的に形成し、そこを基盤とした研究を見定めることによって、テレビ CM 研究を社会一般に汎化させることを期したのである。

２．研究の方法

（1）研究計画

本研究では、下記の 5 つを研究計画の柱とした。

①テレビ CM データベースのネットワーク配信

広範なテレビ CM 資料の閲覧を可能にし、研究者の育成をはじめ、高等教育における有用な学術研究および教育資料とする。

［具体的計画］

平成 21 年現在保有するデータベース約 1 万タイトルについて、ネットワーク配信を行うというものであった。

具体的な方法は――

・学内の既存のサーバおよび LAN を利用する。但し、動画であるテレビ CM データの配信のため、ストリーミング・システムの構築ならびに別個ライセンス料等を要することが課題となった。
・平成 20 年度よりシステム構築等の準備にかかり、平成 21 年度早々にシステムを立ち上げ、稼働させる。
・また、ネットワーク配信に関しては学術研究目的に限定し、閲覧対象研究者へのパスワード付与等を厳格に行うとともに、円滑な運用をはかるため、外部の有識者を含む「テレビ CM データベース運用委員会」を設置することを検討する。
・平成 22 年度内を目標に、本学と国際日本文化研究センター、立命館大学とのネットワークを実現し、テレビ CM アーカイブズの関西拠点（ハブ）を形成する。

・平成 23 年度内を目標に、CM 関連ライブラリー等ならびに大手広告代理店等とのネットワーク上での提携をはかり、わが国におけるテレビ CM アーカイブズの一大拠点（ハブ）の形成をめざす。
・また、ネットワークの効率的運用をはかり、テレビ CM を研究対象とする全国および海外の研究者への配信を試みる。
とくに教育活用に関して、高等学校や中学校を視野に入れた配信・活用の実現に向け、「公正利用（フェアユース）」の可能性を探る。

というものであった。

②テレビ CM 資料の渉猟、デジタル化、データベースへの追記

廃棄・逸失・劣化が進むテレビ CM 資料の保存と活用を促進し、Web 上でのテレビ CM の一大アーカイブズを確立する。

［具体的計画］

・テレビ CM に関する新出資料の渉猟に積極的に取り組むとともに、すでに得られた新出資料情報への対応（デジタル化、アーカイブズ、学術研究資料としての活用等々の交渉）を行い、データベースの拡充を実現する。
・とくに、歴史資料として散逸の懸念される初期テレビ CM を中心にデジタル化を進める。
・そのため平成 22 年以降は、本科研費のほか研究成果公開促進費（データベース）を活用して、新たなテレビ CM のデジタル化を推進、データベースへの追記を順次行うこととする。

③テレビＣＭの実証調査研究

学際的アプローチによってテレビ CM 研究の方法と理論の確立を試みる。具体的には、海外出身者を含む多分野の研究者が 1950～60 年代の日本の社会・生活・文化・科学・技術・消費・経済などの動向と関連づけつつ、テレビ CM の探索的分析を行う。

［具体的計画］

・平成 19 年度より開催中の「テレビ CM 研究会」を継続。映像・アニメーション等の実作者を交えて、より立体的な研究をめざす。
・また、シンポジウム等も開催し、テレビ CM 研究の成果の社会還元をはかるとともに、研究会報告書『テレビ CM 研究』の平成 21 年度版（Vol.2No.3）を発刊し、テレビ CM 研究ほかに資する。
・平成 21 年度で一応の完結を見る、テレビ CM の言語化作業を分析・検証し、現在約 1 万タイトルに及ぶ CM に音楽､デザイン、ファション、産業、メディア、映像、言語、ジェンダー等々の多岐のジャンルから自在に検索可能な辞書項目を付加（研究者はメタ・データを CSV 形式で登録）し、効果的なアーカイブズ活用システムを仮構する。
・平成 22 年度には、辞書項目の追記とともに、仮構したアーカイブズ活用システムを検証・精査し、より効率的なシステムを構築する。
・また、3 年間の研究成果公開（研究成果報告論集）のための準備を開始。

④テレビＣＭアーカイブズ活用システムの構築

多種多様かつ厖大な質量を有する CM アーカイブズの研究・教育利用に資するため、検索項目・辞書項目を設定し、効果的なアーカイブズ活用システムの構築をはかる。

具体的には、③のテレビ CM に関する実証的研究を通して、映像、音、音楽、時間、音声言語、文字情報などをどのように抽出・コード化・分類整理するべきか、方法論を彫琢する。

［具体的計画］

・平成 20 年度中に、既存データベースの約 1/3 の CM（約 3,000 タイトル）につき、映像、音、音楽、時間、音声言語、文字情報（テロップ）などテクスト、コンテクストを含む情報を言語化。
・言語化作業を継続するとともに、どのように抽出・コード化・分類整理するべきか、方法論を彫琢し、多種多様かつ厖大な質量を有する CM アーカイブズの研究・教育利用に資する方法論（アーカイブズ活用システム）を探究する。

⑤テレビ CM データベースの教育活用

映像資料として、本学のアニメーションおよびデジタルクリエーション等の分野での活用をはじめ、歴史資料として人文社会学分野等々での活用を促進するとともに、教育現場での課題を抽出、提言（フィードバック）し、より効果的・効率的な活用法を提示。

また、本学以外での本資料の活用を希望する学術研究の徒にも広く活用の途を拓く。

［具体的計画］

・平成 21 年度に本学のアニメーションおよびデジタルクリエーション、人文社会学分野等々での実証実験活用を行い、教育現場での課題を洗い出し、アーカイブズ活用システムの検証を行う。
・平成 22 年度は、有効なアーカイブズ活用システムの構築を目指して教育現場で実証的に活用し、課題を抽出、研究者にフィードバックする。
・また、アーカイブズ活用システムの最終的検証を行うとともに、実証実験結果を成果として公開し、他校での活用を促進する。

（2）研究体制

テレビ CM 研究が人文学・社会学はもとより多くの学術研究分野に与える効果は計り知れない。テレビ文化は、戦後から現代にい

たる文化の主流をなす、いわゆるポピュラー（ポップ）カルチャーの源泉となり、それを底支えしてきたテレビCMは現代文化そのものを規定する要因となっている。テレビ CM 研究は、その相互連関性を明らかにする突破口としても、大いに期待されるものである。

また、多角的かつ横断的に研究可能な陣容をシフトすること、とりわけ人文社会系の研究者と芸術系（アニメーション、映像学）の研究者あるいは実作者との共同研究の試みは、従来、文化を生成するものと研究するものとに二分されていた関係性（二項対立的パラダイム）からの脱却、さらにテレビＣＭデータベースへの研究と教育の両側面からのアプローチと活用現場からのフィードバックによる重層的研究手法は、少なくとも人文社会学系の研究では稀有である。

本研究によって、研究カテゴリーにおけるブレークスルーおよび研究成果によるブレークスルーの可能性が大いに期待された。

具体的には研究系の研究分担者・連携研究者・研究協力者による、**①ネットワーク配信**：システム構築・他研究機関とのネットワーク形成・ミュージアムや企業とのネットワーク形成、**②データベース拡充**：新資料渉猟・デジタル化および追記・メタデータ付加・データベースへの搭載、**③アーカイブ活用システム構築**：コード化/分類整理・検索項目/辞書項目の設定・システムの検証/精査・精度の高いシステム構築。実作系の研究分担者・連携研究者・研究協力者による、**①人的ネットワークによる配信支援**、**②データベース拡充**：同時代のアニメ作品等新資料渉猟・メタデータ付加/搭載。さらに研究系・実作系研究者による、**①教育活用**、**②テレビ CM 実証調査研究**など研究系・実作系による協働研究推進体制を構想した。

４．研究成果

以下、各研究計画における研究成果である。

①テレビＣＭデータベースのネットワーク配信

テレビCMデータベースのネットワーク配信にあたり、当初計画していた「研究機関間のネットワーク形成」に関しては修正せざるを得なかった。

事由は、研究機関それぞれのインフラが異なること、研究機関ベースの協約が難しいこと、著作権・肖像権・版権等が複雑に絡み合ったテレビCMデータをそれぞれの機関が相互に管理する煩雑さおよびセキュリティ保持のリスクがより大きくなること等、があげられる。

そのため、ネットワークを形成する方式ではなく、共有が可能な CM についてはデジタルデータを共有し、本学が一元的に配信・管理することとした。

まずインフラ整備であるが、テレビ CM の権利関係に鑑み、学内の既存のサーバとは別個にサーバを立て、配信に関しては既設のものを利用することとした。

平成 20 年度より、某社のサーバの導入を検討していたが、特殊性が高く、汎用性に乏しいこと、PC 端末での不具合の懸念や高価格から断念、市販の FileMaker を基盤としたシステムを構築することとなった。その結果、当初計画では 2009 年度初めにはシステムを構築する予定であったが、システム構築を完了したのは 2009 年度末となった。

その後も、運用協議会準備会を頻回開催し、データベースのインターフェースの改良をはじめ、閲覧におけるセキュリティー保持について協議を重ねた。

その結果、テレビ CM データベースの運用に関しては運用協議会を設け、「テレビ CM データベース運用協議会基準」「テレビ CM データベース利用基準」を策定。さらに利用希望者には「閲覧願書」（研究計画書）を提出のうえ、運用協議会メンバーの承認を経た後、事務局から ID/パスワードを付与、1 年度ごとに更新、「誓約書」の提出を義務づけることとし、現在に至っている。

②テレビ CM 資料の渉猟、デジタル化、データベースへの追記

平成 21 年当初、すでにデータベース化されていた TCJ 社作品 9,096 レコード、さがスタジオ作品（147 レコード）、ハイスピリット社作品（1,127 レコード）、計 10,370 レコードに加え、平成 21 年度には新たにハイスピリット社作品（1,648 レコード）、平成 22 年度に TCJ 社作品（1,654 レコード）、シバプロダクション作品（510 レコード）をデジタル化したのをはじめ、平成 22 年度、平成 23 年度には研究成果公開促進費（データベース）により「大阪萬年社コレクションのテレビ CM データベース」を作成（平成 22 年度 2,355 レコード/平成 23 年度 2,701 レコード）を追記。現在、データベースの総レコード数は 19,238 となり、本科研当初の倍のスケールとなった。

なお、TCJ 社作品については、平成 24 年度研究成果公開促進費に採択され、約 2 万レコードを超す勢いでデジタル化および追記を実現している。

テレビ CM 原版については、フィルムのほかμマチック等、すでに再生機器自体の存在が危ぶまれるものも多くあり、こうしたメディアに記録された映像のデジタル化―保存―蓄積―管理―運用は、テレビ CM 研究や昭和 30 年代研究にとって必須の課題となっている。

③テレビ CM に関する実証調査研究

テレビ CM の実証的研究は、平成 19 年の第 1 回テレビ CM 研究プロジェクト・関西ア

ニメーション史研究プロジェクトによる合同研究会を皮切りに、平成 21 年に開催した国際日本文化研究センターとの合同シンポジウム「テレビ文化は残せるか：著作権・アーカイブズ・コマーシャル」にいたるまで、研究会 7 回（内、第 4 回研究会は日本マスコミュニケーション学会理論研究部会との合同研究会）、シンポジウム 2 回を開催し、その詳細を研究会報告書『テレビ CM 研究』で報告している。

研究会での報告は研究協力者を含め、社会学、人文学、経済産業史、メディア論、表象文化論、著作権、ジェンダー、音楽、映像文化論、文化史（ファッション史）デザイン史、アニメーション史、アニメーション制作等々、多分野から多角的になされた。

さらに、平成 21 年度には、平成 22 年度に刊行を予定していた研究成果論集向けて、連携研究者である高野光平（茨城大学人文学部准教授）、研究協力者である難波功士（関西学院大学社会学部教授）を編者とし、執筆要項の策定、執筆分担の策定、執筆、検討会に傾注し、平成 19 年度からの研究成果の総括を行った。

その結果、平成 22 年度 7 月に『テレビ・コマーシャルの考古学：昭和 30 年代のメディアと文化』（世界思想社）を刊行、『文化としてのテレビ・コマーシャル』（山田奨治編、世界思想社、2007 年）に次ぐテレビ CM 研究の成果（論集）を世に送り出すことができた。

本書は、研究分担者、連携研究者、研究協力者 10 名が執筆、本文 9 章、コラム 7 編からなり、〈昭和 30 年代におけるテレビ CM〉〈CM 言語の「断層」〉〈テレビ CM における音楽〉〈CM アニメ制作〉〈CM 表現のパターン化とオーディエンス構築〉〈昭和 30 年代 CM に見る若者像〉〈海外・沖縄向け CM と日本〉等、テレビ CM を多角的な見地から実証的に分析・考察。テレビ最初期のテレビ CM に関するわが国初の学際的な研究書と位置づけられよう。

テレビ CM に関する実証的研究で重要な位置を占めたのが、テレビ CM の言語化作業である。詳細は次項に述べるが、従来、昭和 30 年代の文化・政治・経済はもとより、テレビ CM 等のマスメディアにおいてまことしやかに伝えられてきた昭和 30 年代言説、テレビ CM 言説の実証的分析研究に不可欠な位置を占めるに至った。

④テレビ CM アーカイブズ活用システムの構築

テレビ CM アーカイブズを活用するうえで重要な位置を占めるのがデータベースの検索項目である。

データベース運用開始当初は――

〈メタデータ〉

1. タイトル
2. 会社名（広告主）
3. 制作会社
4. 作品時間
5. 制作年

〈辞書項目〉

6. カテゴリー
7. 商品分類

であった。

しかしながら、実際に検索をかけると、例えば「炊飯器」で検索をかけても「ガス炊飯器」「電気炊飯器」ではカテゴリーが異なり、目的の CM にたどり着けない等の不便さがあった。

また、昭和 30 年代における企業分類と現行の分類とでは異同があることや時代によって分類が変遷することもわかった。

本データベースになじんだ研究者はともかく、異分野の研究者や教育現場での活用を想定・考慮した場合、新たな検索方法を必要とした。

データベースにおいて、言語化データが付帯することの最大の利点は「自由語検索」が可能となることである。言語化データの搭載により、異分野から（テレビ CM 研究では想定外）の言語検索をかけても、的確にヒットする、より使いやすいデータベースとなることが示された。

而して、本研究では、CM 言説をめぐる実証的研究の基盤となる言語分析資料として、またアーカイブズの研究・教育活用の促進に向けて、研究会やシンポジウムと併行して、研究協力者である辻大介（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）の指導のもと、テレビ CM 言語化作業を積極的に推進した。

平成 23 年度までに言語化した CM の内訳は次のとおりである。

・TCJ 社作品	9,096 レコード
・さがスタジオ作品	147 レコード
・ハイスピリット社作品	2,775 レコード
・計	12,018 レコード

なお、平成 24 年度以降は、本学共同研究および科学研究費補助金：基盤研究 B（研究課題名：テレビ文化アーカイブズの構築―テレビ番組研究・テレビ CM 分析を統合する視点の研究）を原資とし、平成 22・24 年度デジタル化 CM（TCJ 社作品−Ⅱ・Ⅲ/シバプロダクション作品）の言語化作業および平成 22・23 年度デジタル化 CM（萬年社コレクション）の言語化作業を継続する予定である。

⑤テレビＣＭデータベースの教育活用

テレビ CM データベースの教育活用については、各研究者レベルで学生・大学院生等を対象にさまざまな活用がなされた。

講義での使用をはじめ、ゼミでの使用、さらに卒論等での活用例が報告されているが、それぞれの成果や使用上での課題について

は、現在、集積されていない。
使用環境や対象も異なり、一律には言及できないが、従来の実績を踏まえつつ、今後どのような活用方法が見いだせるかはデータベースとしての可能性を探るうえでも重要な課題である。
とくに、言語データを搭載した Web 配信による教育活用への効果は、今後の展開に大きな期待がもてる。継続的研究のなかで、検証を重ねていく予定である。

⑥今後の研究教育活用における課題と展望

テレビCMデータベースの研究教育活用を阻む大きな要因に著作権・肖像権・版権等が複雑に絡み、それによって研究成果の公開が思うに任せない現状がある。フランスや韓国においてはすでにテレビCMの国家的管理が確立し、研究教育活用が大幅に緩和されている。
しかしながら、わが国では ACC（社団法人全日本シーエム放送連盟）の定めた、CM の 2 次使用に関する基準＝広告主、広告代理店、制作会社の許諾が条件とされ、それも法的拘束力のないなかでの手探り状況が続いている。
私たちを取り巻くテレビメディア環境は、20 世紀後半から現在に至るまで、社会や日常生活に圧倒的な影響を及ぼしてきた。
テレビ番組・テレビＣＭ・映画・ラジオ番組などは、それぞれの時代に人びとが経験した出来事の記録であり、社会の集合的記憶を形成し想起させる文化的・社会的資源と捉えられる。
映画 100 年、ラジオ 80 年、テレビ 50 年のそれぞれの歴史を研究するための基礎資料アーカイブを作り上げることは、文化的・社会的資源の形成という重要な性格を持っており、21 世紀のデジタル化時代に入り、世界各国で競い合うように推進されている。
テレビ映像文化は、グローバルな文化消費と流通回路をその特質とする。もっとも顕著な例は YouTube などの動画サイトの展開や国際的な映像配信サイトの流星であろう。映像文化を対象とする研究成果発信は、国際的に行われることが何より重要である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計７件）

高野光平、テレビ・アーカイブズとどう向き合うか、年報社会学論集、査読無、22 巻、2009、32-43
石田佐恵子、映像アーカイブズを用いたテレビ文化研究の可能性、テレビ CM 研究、査読無、Vol.2 No.2、2009、27-35
高野光平、テレビ CM の保存と公開、テレビ CM 研究、査読無、Vol.2 No.2、2009、41-46
井上雅人、インダストリアルデザインから見たテレビ CM、テレビ CM 研究、査読無、Vol.2 No.3、2009、6-27
津堅信之、関西アニメーション史（昭和 20～30 年代）研究における調査結果の概要、テレビ CM 研究、査読無、2009、Vol.2 No.3、38-49
石田佐恵子、ビジュアルデータ・アーカイブズを用いた二次分析の可能性、社会と調査、査読有、8 巻、2012、54-63
石田佐恵子・岩谷洋史、テレビ映像資料の収集と保存に関する実践的研究―3.11 テレビアーカイブ・プロジェクトの事例から、人文研究（大阪市立大学文学研究科紀要）、査読有、63 巻、2012、109-132

〔学会発表〕（計４件）

辻大介「放送初期テレビ CM データベースを用いた広告表現の試行的分析」日本マス・コミュニケーション学会理論研究部会、2009 年 6 月 5 日、キャンパスプラザ京都
高野光平「テレビ・コマーシャルの考古学―昭和 30 年代を問い直す」日本マス・コミュニケーション学会メディア史部会、2010 年 3 月 13 日、関西学院大学梅田キャンパス
辻大介「CM 言語の「断層」、一九五〇／六〇」日本マス・コミュニケーション学会メディア史部会、2010 年 3 月 13 日、関西学院大学梅田キャンパス
石田佐恵子「アーカイブスの学術利用がひらく地平／第 2 部　討論：NHK アーカイブスが切りひらく新しい「公共」」NHK 放送文化研究所シンポジウム（招待講演）、2011 年 5 月 19 日、千代田放送会館

〔図書〕（計３件）

高野光平・難波功士編『テレビ・コマーシャルの考古学―昭和 30 年代のメディアと文化』世界思想社、2010 年
石田佐恵子ほか『萬年社コレクション　CM データベース資料集〈2010 年度版〉』大阪市立大学萬年社調査研究プロジェクト、2012 年
津堅信之『テレビアニメ　夜明け前―知られざる関西圏アニメーション興亡史』ナカニシヤ出版、2012 年

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：

権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
　研究会報告書や著作権・版権の消滅したCMの一部公開によるデータベース活用の促進をはかるべく準備は進めているが、業界の協力が得られないため、現状では公開できない状況にある。

６．研究組織

(1)研究代表者
前田庸生（MAEDA TSUNEO）
京都精華大学・マンガ学部・教授
研究者番号：50434759

(2)研究分担者
・井上雅人（INOUE MASAHITO）
武庫川女子大学・生活環境学科・講師
研究者番号：60388189
・村瀬敬子（MURASE KEIKO）
仏教大学・社会学部・准教授
研究者番号：20312134
・森原規行（MORIHARA NORIYUKI）
京都精華大学・デザイン学部・准教授
研究者番号：40434732

(3)連携研究者
・高野光平（KONO KOHEI）
茨城大学・人文学部・准教授
研究者番号：70401156
・梁　仁實（YAN INSHIRU）
岩手大学・人文社会学部・講師
研究者番号：20464589

(4)研究協力者
・石田佐恵子
（大阪市立大学大学院文学研究科教授）
・辻　大介
（大阪大学大学院人間科学研究科准教授）
・難波功士（関西学院大学社会学部教授）
・小川博司（関西大学社会学部教授）
・山田奨治
（国際日本文化研究センター准教授）
・赤間　亮
（立命館大学大学院文学研究科教授）
・大橋雅央
（同志社大学大学院総合政策科学研究科博士課程）
・Pongsapitaksanti Piya
（長崎県立大学国際情報学部准教授）
・中尾ハジメ（京都精華大学人文学部教授）
・津堅信之（京都精華大学マンガ学部准教授）
・前田　茂（京都精華大学人文学部准教授）
・安田昌弘（京都精華大学人文学部准教授）